いずみさの昔と今 第342回

「泉佐野の古墳」

3月から開催中の春季企画展「歴史発掘 大阪 2023」と関連し、今回は泉佐野の古墳について紹介します。

古墳時代は大きく前期（3世紀中頃～4世紀）・中期（4世紀後半～5世紀）・後期（6世紀～7世紀初）・終末期（7世紀）に分けられますが、それぞれの時期で埋葬施設や副葬品などその内容に違いがみられます。古墳と言えば、堺市百舌鳥古墳群のような全長100mを超える巨大な前方後円墳を思い浮かべる人が多いでしょう。このような巨大古墳群は当時の大王クラスの墳墓であり、日本全国どこにでも存在するものではありません。各地域にはその地域毎に特有の古墳文化が息づいていました。

では、市域の古墳はどうでしょう。市域で古墳が築かれるようになるのは、前述の時期区分のうち中期、5世紀後半頃からですが、前方後円形の大形墳は存在していません。市域で古墳が集中して築造される地域が長滝地区です。長滝古墳群と命名されたこの古墳群では現在まで5世紀後半から6世紀の古墳が7基発見されています。このうち、その形状が最もわかる古墳が2号墳です。一辺約18mの方形墳で、周溝幅は1.2mです。1号墳は2号墳の北側に近接して発見されました。部分的に周溝を発見したことにより古墳と認識され、一辺約20mの方形墳であったと考えられています。1・2号墳とも埋葬施設は残存していませんでしたが、おそらく木棺直葬であったと推定されています。遺物は両墳とも周溝内から、須恵器や埴輪が破片となって数多く出土しています。須恵器の中には祭祀専用に製作された器台や壺があり、おそらく堺市の「陶邑」（すえむら）から供給された可能性が高いものです。埴輪には円筒埴輪の他に巫女形人物埴輪や盾形埴輪があり、墳丘を飾った状況を想像させてくれます。築造時期は1号墳が5世紀後半、2号墳が6世紀前半です。

3・5号墳は周溝の一部を検出したのみで、墳形などの詳細は不明です。出土遺物から3号墳は6世紀中頃の築造とされています。4・7号墳はいずれも河原石を積み上げた小石室墳です。これらも石室のみの検出に留まり、墳形や周溝の有無は不明です。築造時期は、1・2号墳より新しく6世紀中頃から末頃です。

次に、この古墳群の被葬者像について触れておきます。古墳群の規模やその継続性、供献品の内容を勘案すれば、被葬者はおそらく上之郷・長滝地区を本拠にした当地域の首長層と考えられます。実際、古墳に隣接する三軒屋遺跡・諸目遺跡では、建物や溝をはじめとした数多くの遺構が検出されています。さらに、出土遺物には須恵器生産が開始されて間もない頃のものや渡来系の土器、紀伊地域の特徴を持つ須恵器などがあります。このような特徴的な遺物からは、この地の首長層と、渡来系集団や紀伊を中心に活躍した人々との関係も注目されます。ヤマトと紀伊との地理的な関係から、当地は交通の要所として重要な場所だったのかもしれません。

▶長滝1号墳出土須恵器（泉佐野市教育委員会提供）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

JAPAN HERITAGE
日本遺産

日本遺産・葛城修験文化を巡る⑩

～七宝瀧寺と葛城修験～

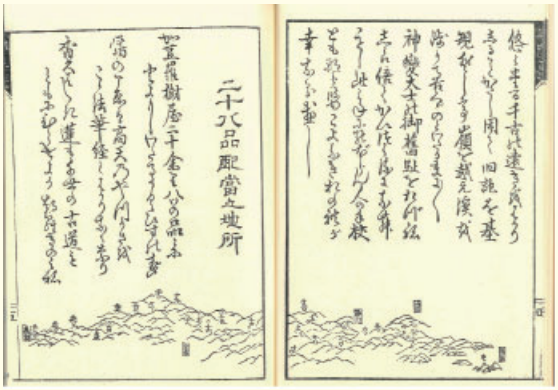
「日本遺産」に追加認定された「葛城修験 ― 里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

今回で「葛城修験－里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」の話はいよいよ終わりとなります。

七宝瀧寺の位置する葛城山系は、役行者が法華経を納めた峰で「法華の峰」とも言われています。明治の修験道廃止令の前から現在に至るまで、修験道は多くの歴史的変遷をたどっており、鎌倉時代初期の「諸山縁起」や江戸時代後期（嘉永3〔1850〕年）の「葛嶺雑記」の中で下記のような特徴が読み取れます。

鎌倉時代では95の行所があげられ、水の信仰と結びついた龍神の他界、死者の他界、仙人の居所、仙人の居所に結びつく行所だと考えられています。修験者はそうした場所で読経・写経などで修業をしたようで、古代以来、霊山浄土の性格を強めていきます。江戸時代になると、これまでの山の他界に加えて対になる友ケ島の海の他界が登場し、自然景観の他界と古代以来からの行所を中心に天台、真言の主要な寺々が建てられ、重層的で巡礼的な色彩を持つようになりました。（他界…現実とは別の世界、よその世界）



▲葛城二十八宿配当之地「葛嶺雑記」